中日ドラゴンズ 矢野博也社長インタビュー

それぞれが原点に向かって 強竜復活へのお手伝いをしていきたい

二〇一七年のシーズンもスタートしたプロ野球界。地元球団である中日ドラゴンズはここ数年低迷が続いている。今年からは体制も一新、監督には森繁和氏が就任し、開幕から足を絡めた野球をつけ意識が変わり始めている。二月に中日ドラゴンズ社長に就任した矢野博也氏に今年、そしてこれからの中日ドラゴンズについて話を聞いた。（聞き手／中部財界フォーラム社代表取締役塚本隆）

——外と中からみたドラゴンズの違い等ありましたか。

矢野 これまでは、一ファンとして見ていました。今までは新聞を売っていたので、少しでも勝つてくれればという思いはありました。しかし、当事者となった今では、大きく変わりましたね。キャンプ、遠征など同行して見ていると非常に多くの人が球団に関わっています。それぞれの人間が一体

となつて進まなければ良い結果につながらないのではと考えるようになりました。

まずは、ドラゴンズの現状を正確につかむことが大事だと思っています。

——森監督が必要とする人材は補強できていますか。

矢野 私たちの立場と監督の立場は違うと思います。監督は、個々の選手の怪我や調子の善し悪し、

そして相手との相性もあり、必要な人材を総合的に判断しなければなりません。一方で、代わりの選手もただ多くいればいいという訳ではなく、数多く選手を獲得しても試合に出場できる人は限られており、出場できるチャンスがなければ選手にとつても不幸です。

若い選手の中にはけがなどで出遅れている選手もいますが、彼らが一軍で戦うようになれば、面白くなるのではないのでしょうか。ですので、今の段階では十分に戦っている人材が揃っていると思います。ある程度戦ってみて、そのときどうしても新たな戦力が必要なのか時には、森監督から相談があるかもしれません。

——森監督に期待することは。

矢野 森監督は非常に広い人脈を持っておられ、大事にしている。選手はもちろん、裏方スタッフに対して気遣いができる方です。それらを活用していただき、強いドラゴンズの土台づくりに期待しています。先発投手の役割は大事ですね。試合が作れないと監督の出番もないですからね。また、選手全員が一生懸命やっている姿を、見に来たお客さんに伝わるようなチームに育ててもらいたいと思います。

——近年プロ野球は地域やファンと一体となつて進んでいる所が増えています。地元唯一の球団としてファンとの関係をどのよう